

特集論文

稲作農業の機械化と女性農業労働の変化 —滋賀県の湖岸部集落における調査から—

柏尾 珠紀

Farm mechanization and its impact on women's work in farming households

Tamaki KASHIO

Visiting Professor, Research Center for Environment and Sustainability

There were a number of skilled tasks carried out by women in paddy cultivation before the mechanization of most operations related to rice cultivation in the 1970s. It was only women who transplanted paddy seedlings before the transplanter was developed, but after farm mechanization was completed, the tasks left to women were peripheral tasks that did not require any skill. The women in farming households started having little to do with their family's farming business. This study investigates the changes in the various tasks carried out by women after the introduction of agricultural machinery and the relationship of women with family farms run by their husbands. The mechanization of cultivation, i.e. the introduction of tractors, had little impact on the women's tasks. However, the introduction of the walking-type transplanter in the 1970s had significant effects on women. They were pleased with the new machinery because they did not have to crouch for a long time to transplant the seedlings in the cold water during the transplantation season. However, when the riding-type transplanter was introduced, women were asked by their husbands to be engaged in a large amount of unexpectedly arduous work. Furthermore, they became less interested in rice cultivation because they did not have the opportunities to learn how to operate the machinery, and their husbands monopolized all the skills that were required not only to operate the machinery but also to run their farm as a whole. Agricultural mechanization ironically alienated women from various farm-related tasks and farm management.

Key Words: farm mechanization, women's work, rice cultivation

1. 問題関心

戦後日本の農村では、民主化政策のもとで農地解放をはじめ農業改良普及事業などが実施され、農業や農村の暮らしは根底から再編された。

多くの自作農が創設された際に重視されたのが、米作りにおける生産基盤の近代化であり農業経営の効率化であった。農業技術の発達で農機具を進歩させ農業機械を生み出

し、復興期を経て10年足らずで稲作農業は機械化された。当時の農村では稲作農業の機械化と土地改良事業は車の両輪として併進した。

1955年からわずか10年で260万頭の役畜が姿を消し、田起こしの作業は動力耕耘機に取って代わった。このような農業経営の合理化に向けた変化は「世界に例を見ない変化である」¹⁾と述べられており、この合理化の過程で農業

労働の内容も劇的に変化した。この変化の下で、誰がどのような農業技術を保有しており、それがどのような農業機械に取って代わられて農業労働の再編を引き起こしたのか、とりわけ、稲作経営の重要な担い手であった女性の労働がどのように再編されたのかはあまり注目されていない。

稲作農業経営において中型機械一貫体系が確立した当時は、経営の効率化や経営規模の拡大過程に多くの注目が集まり、家族内における労働や技術の担い手の変化はあまり検討されなかった。機械化によって家族内の労働再編が実際にどのように起こったのか、それが農業とのかかわりをどう変化させたのかを明らかにすることは、その時々において優先されたことを知る手がかりになる。だから、担い手不足といわれる現代農業を考えるにあたり、変化の起点である稲作農業の機械化の初期段階から中型機械への移行の過程を考察することは、農業、農村の将来を展望するにあたり重要である。そしてそれは同時に、女性と技術の関係や人間開発というジェンダー研究の視点からも重要であると考える。

稲作経営における機械化過程の技術と経営に注目した荒木(1989)は、滋賀県の農業集落の調査から、導入された機械の規模とそれによって解消された労働や家族労働力の移動について、経営の発展から明らかにした。だが、諸労働の担い手や技術にはあまり注目していない。他方で、農業労働の担い手や労働の内容を記した新保(1983)は、機械化以前の北陸地域における耕起や田植えの女性労働を詳細に記しており、それぞれの技術が誰に保有されていたのかを知る手がかりとなる。そこでは、田植えは女性にとって晴れの舞台であり重要な行事であったと記されている²⁾。

細谷(1998)は、農村社会における家とむらの変容を経営の再編から分析した。手労働から機械労働へ発展する過程における、家族の労働再編や技術の発展について注目しているが、女性の労働と技術については言及していない。他方で、女性や家事労働に注目した大森ほか(1981)は、生活史の視点から農村の暮らしにまつわる研究史を整理している。しかし、農業労働のなかにある女性の技術を意味づけるといった視点は希薄である。女性の農業労働を知る手がかりとなる有用な情報は、宮本(1975)や地域史(2006)、女性史(2002)のなかに記述されている。いずれも断片的ではあるが、機械化が家族成員間にどのような労働内容の変化を引き起こしながら展開したのかを検討するにあたり示唆的である。このように、女性の農業労働の内容変化を技術と機械化との関係から体系的に考察した研究は希薄だ

といえる。

そこで、本論では農業の先進地域といわれてきた滋賀県湖東地域の農業集落の調査から、稲作農業の機械導入期から中型機械一貫体系成立期における女性農業労働の内容と、その変化を明らかにすることで、機械化が女性の農業労働にどのようなインパクトを与え、女性と技術とのかかわりをどのように変化させたのかを考察する。

以下では次のような手順で進めることにする。2では、調査集落における農業構造の変化について、農家の構造や経営、女性の農業就業者の変化を中心に概観する。3では、稲作農業の機械化初期段階で女性農業労働がどのように変化したのかについて、語りから具体的に明らかにする。4では、農業の機械化のインパクトや機械化が女性と技術とのかかわり方をどのように再編したのかを考察し、最後に全体をまとめる。

2. 湖岸部 X 集落における農業構造の変化

2-1 琵琶湖岸 X 集落の概況

琵琶湖のほとりにある X 集落は大河川の最下流湖岸部に位置する開墾地である。開拓時は 42 戸、田畑宅地などを合わせた総面積が約 21.6ha であった。広大な水辺と葦が眼前に広がる景観が特徴である。水辺で低地であるため、長い間水害に悩まされてきた歴史が残されており、集落の暮らしは農業経営と水害との戦いであったと語る人もいる。

開墾から 200 余年を経て現在は、戸数 91 戸、人口 330 人、そのうち約半数の 115 人が 65 歳以上という農業集落である。高度経済成長期には湖岸部で観光開発もなされた。湖岸部の別荘地には非農家世帯が居住しているが、農家とは明確な住み分けがなされている。2010 年センサスによると農業経営面積はおおよそ 70ha であり、総農家数 47 戸のうち専業農家が 5 戸、第 2 種兼業農家が 42 戸、第 1 種兼業農家は存在しない。

主な経営は水稲作であるが転作の麦大豆もある。集落内には営農組合があり、現在おおよそ 60% の経営は営農組合への委託となっている。また、琵琶湖岸という地理的な条件を重視しており、積極的に環境保全型の農業に取り組んでいる。2010 年での農業従事者人口は男性 63 人女性 47 人の合計 110 人、農業就業人口は男性 19 人女性 24 人の合計 43 人である。

現在の農業就業人口を性別年齢別にみると、男性 15 歳から 59 歳までの就業者は 0 人、60 歳から 64 歳までが 2 人、65 歳以上就業者が 17 人である。他方女性では、15 歳から

29歳の就業者は2人、40歳から59歳の就業者は4人、60歳から64歳が4人、65歳以上が14人となっている。これらの人々のうち農業専従者は男性が3人、女性が3人である。ここからは、X集落の農業が、数件の専業農家の専従者と営農組合とによって成り立っている現状がみてとれる。

滋賀県湖東地域では、戦後の経済復興に呼応した1953年の農業機械化促進法の下で、著しい速度で農業経営の合理化が進められた。農村で最初に起こった変化は、歩行型耕耘機の導入であった。また同じ頃に、地元や近隣に数多くの兼業機会が創設され多くの男性労働力が農外へ流出した。次項では、この間における農業構造の変化を概観しておこう。

2-2 1960年から1980年代の地域農業の変化

表1は1960年から1990年までの農家数の推移である。機械導入期である1960年から70年にかけて農家数はなだらかに減少したが、それに比べて専業農家は22.6%から5.8%へ激減している。また、田植え機や自脱型のコンバインが普及した1970年から75年にかけては、第1種兼業農家が48.8%から7.1%へと激減し、それに対して第2種兼業農家が45.3%から88.2%へと激増した。当集落では、機械が導入され普及したこの時期までにほとんどの農家が

兼業化したことがわかる。近隣で労働市場が発達したことで多くの農家から労働力が流出し、その流出した労働力と農業機械が入れ替わったと考えてよいだろう。

図1には経営耕地面積別農家数の推移を構成比で示している。1960年代は0.3ha未満と0.5ha未満の経営と0.5haから1.0haまでの経営がそれぞれ約40%を占めており、おおよそ8割の農家が、家族労働力と繁忙期の雇用労働によって経営できる規模であったことがわかる。耕耘機が導入された時期の1960年から1970年にかけては0.5haまでの経営は半減したが、田植え機が普及し始めた1975年にかけて再び小規模経営は微増したことがわかる。

同集落における稲作農業の機械の導入と普及の過程もみておこう。1970年センサスによると、1960年には動力耕耘機は共同所有が1台あったのみであり、歩行型の耕耘機が10台であった。その当時はまだ役牛も19頭飼育されていたことが記録されている³⁾。だが、1965年になると耕耘機の台数は48台へと激増し、さらに1970年には90台へと倍増した。その内訳をみると、10馬力以上のトラクターが4台導入されていた。1970年の農家数が86戸であることから、中型、小型のトラクターと手押しの耕耘機など複数台を所有して経営を合理化し、規模を拡大した農家が出てきたことがわかる。

表1 農家数と専業兼業農家数の推移

	総農家数(戸)	専業農家(%)	第1種兼業農家(%)	第2種兼業農家(%)
1960年	93	22.6	46.2	31.2
1970年	86	5.8	48.8	45.3
1975年	85	4.7	7.1	88.2
1980年	78	1.3	2.6	96.2
1985年	70	5.7	1.4	92.9
1990年	59	6.8	0.0	91.5

出所) 1970年、1990年世界農林業センサス集落カードより作成

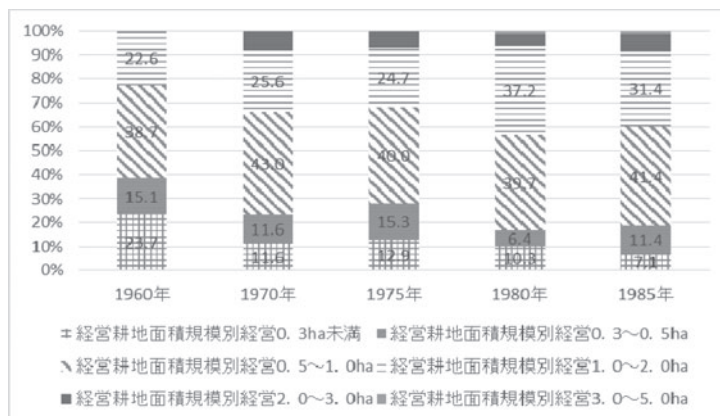


図1 経営耕地面積別農家数の推移

出所) 表1と同じ

注) 1960年においては、経営耕地面積1ha～1.5haの農家が19戸、1.5ha～2.0ha農家が2戸となっているがここでは1.0ha～2.0haとまとめて記した。

他方で、1970年には刈取り機が14台、自脱型コンバインが6台、動力撒粉機や動力噴霧器が27台、乾燥機が6台、田植え機が5台導入されている。さらに1975年になると、トラクター113台、田植え機が41台とあり、田植え労働の機械化がいよいよ一般的なものへと始まり始めたことがわかる。1980年には機械の大型化にともないトラクターは101台、田植え機は62台となった。この頃にほとんどの農家で稲作経営における機械化一貫体系が実現されたと考えられる。また当集落ではこの時期に二度の圃場整備が実施された⁴⁾。

このように、X集落では、1960年代に歩行型の耕耘機が普及し始め、1970年代には乗用型のトラクターへと発展、浸透した。他方で、刈取り機は1965年頃から出始め、それがコンバインに発展し、1975年以降に乗用型の自脱型コンバインへと展開した。田植え機は1970年に導入され始めて数年で一気に普及するという経緯を辿った。

では次に、機械導入初期である1960年から普及にいたる1980年までの期間で、女性農業専従者がどのように変化したのかについてデータで確認しておこう。

2-3 女性の農業就業者の動向

図2は1ha当りの男女別農業専従者数を示している。動力機械がまだ一般的とはいえない1960年は、農家1戸当りの農業専従者は男性0.8人に対して女性1.4人の割合であった。1960年代は耕耘機、トラクターが普及し始める時期である。この時期は、まだ農業所得が主たる収入である第1種兼業農家も相当数存在したが、すでに約3割が第2種兼業農家であった。

だが、田植え機が導入された1970年以降は、男性よりも女性の農業専従者が減少し、田植え機がより広く浸透する1975年、1980年になると、当集落では女性の農業専従者はほとんどいなくなったことがわかる。

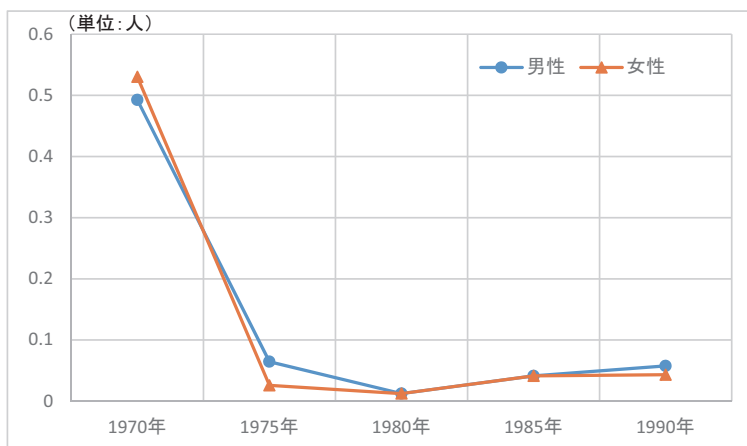
つまり、トラクターが普及した1970年以降、男女ともに農業専従者は激減するのだが、田植え機が導入され普及した1975年から1980年にかけては、女性の農業専従者数が男性のそれよりも著しく減少した。このことはこの時期に当集落で多くの女性が家の稲作経営から離れたことを意味しているのである。その過程をより明らかにするために、次節で女性農業者の農業労働の内容の変化と再編の過程をくわしくみていこう。

3 機械化による女性農業労働の変化

3-1 機械化以前における女性の農業労働

X集落で農業が機械化される以前に、女性がどのような農業労働を担っていたのかについて明らかにするために7名の女性と2名の男性から聞き取り調査をおこなった⁵⁾。調査時期および対象者は注に記したとおりである。そのなかのRさんのライフヒストリーを中心に稲作農業が機械化される以前に女性が担っていた主な労働の内容をみてみよう。Rさん(80歳代)は、1930年代に同村で生まれ育ち結婚した女性である。結婚当初は専業農家であったが、1960年代後半に夫が農外に働きに出て兼業農家になった。

表2は農業の機械化以前と機械化後にRさんが担った主な農業労働を記している。当集落では15歳になると女性は本格的に田植え労働に参入した。Rさんも同じく15歳で田植えを始めて家の農業を手伝っていたが1940年代



出所) 2010年世界農林業センサス集落カードより作成

図2 1ha当り男女別農業専従者数の推移

表2 稲作農業の機械導入前後における女性農業労働の内容変化

田作業	機械化前	歩行型機械	乗用型小型機械	乗用型中型機械
耕耘	牛耕の碎土労働	なし	なし	なし
育苗	補助労働	補助労働	補助	なし
田植え	苗取り、結束、移植、後片付け	苗取り、準備	苗箱運び、補助	ほとんどなし
除草	手抜き、埋め込み労働	草刈機で畦草刈	畦草刈	なし
刈取り	鎌刈り、結束、はさ架け	束拾い、はさ架け	下回り作業すべて	ほとんどなし
麦、菜種	補助労働	補助労働	なし	なし

出所)聞き取り調査より作成

に結婚し、結婚後は婚家の農業に携わった。その労働内容とその変化は表にあるとおりであるが、耕耘作業から具体的にみていこう。

1950年代に歩行型耕耘機が導入される以前、Rさんの家では牛耕だった。牛耕のとき彼女は牛の後ろで碎土をする労働を担った⁶⁾。牛は舅や夫が操り、女性は牛が耕した後をついて歩きながら大きな土の塊を小さく砕いた。この作業を同じ田で何度もおこなった。田への水入れは舅と夫がおこない、田に水を入れた後も彼女は田に入りさらに土を細かくするために足で土を踏む作業をおこなった。

この労働と相前後して育苗が始められたという。育苗は舅と夫が中心におこなったが、女性も男性の指示に従って水管理や発育状態の観察をしたという。田植え労働においては、苗代の苗を取りその苗を束ねて田に持って行く準備はもちろんのこと、植え付けから後片付けまでが全て女性、とりわけ若嫁、の仕事であった。また、一人で一日一反の苗を植えられてようやく一人前といわれたという⁷⁾。Rさんは田植え時期には、夜11時ごろまで翌日の準備をおこなってから就寝し、夜中の3時には起床し苗代に行き苗取りをして誰よりも先に田にいった。それはたとえ乳飲み子がいても配慮されることはなく、若嫁は最初に田に入り仕事を始め最後まで仕事をしなくてはいけなかったという。

Rさんの家でも田植えは知り合いや親戚の女性に依頼して大勢でおこなう行事的な位置づけであったという⁸⁾。早くまっすぐに田植えができる女性は、ほかの農家からの田植え仕事の依頼も多かった。田植えは今ほどではないにせよ、一斉におこなわれたため、作業が早くてうまく田植えができる女性を確保することは、大規模経営の農家にとっては最重要課題であった⁹⁾。当時は多品種を栽培していたため、田植えはほぼ1ヶ月間続いたという。

夏場は除草作業をおこなった。田の草取りは主にRさんと姑の仕事だったという。田の草を手で抜いて、それらを肥料にするために稲の株間に埋め込むのである。夏場の

暑い時期に分散した自作地で毎日おこなったという。女性たちによる除草労働は刈取り直前まで続けられ、男性は主に畦の草刈りや施肥管理をおこなった。

刈取りはどこの家でも子どもや親族も含めて一家総出の労働であった。当集落では11月23日に開催される集落の祭りまでに各農家は刈取りを終えていたという。刈取りにおける女性の労働は、鎌で稲を刈り取り、その稲を結束することとその稲束をはさに架ける作業などであった。以上がRさんの稲作経営における主たる手労働であった¹⁰⁾。

では、これらの女性労働が農業機械の導入でどのように変化したのかについて、トラクター（耕耘）、田植え機（田植え）、コンバイン（刈取り、脱穀）についてみていこう。

3-2 機械導入の初期段階における女性農業労働の変化

Rさんの家では農業の機械化は彼女が30歳代後半で始まったという。二人の子どもがそれぞれ小学校と中学校の生徒だった。最初に導入されたのは歩行型の手押しトラクターであり、その後、乗用型耕耘機、刈取り機、コンバイン、田植え機の順に導入された¹¹⁾。歩行型の耕耘機の導入から始まる農業の機械化により、女性の労働がどのように変化したのか、また、当時女性たちがどのように思ったのかについて、以下にRさんの回想からみていこう¹²⁾。

「寒い頃から始める田の準備は大変でした。私は牛のいる家に嫁にきて本当によかった。牛のいない家の嫁さんはかわいそうだと思った。牛の（牛耕）ときは3畝（0.03ha）ほどの田んぼを耕するのに一日ほどかかったと思います。牛は田植え（のときの耕耘）だけでなく稲後の麦作（のための耕耘）にも使いました。女は牛の後ろをついて歩いて土の塊をかじりました（碎土労働）¹³⁾。これは歩く耕耘機の時もちょっとはしましたが回数が減りました。機械を使わなかった場所では鍬で（土を）起こしましたが、そんなのも減りました。おばあさん（義母）はそのころには耕耘

の仕事はしてなかった、家のことが主な仕事やった」

Rさんの家では、1960年代前半に歩行型の耕耘機が導入されたという。歩行型の耕耘機が導入されるとRさんと姑は碎土労働がなくなり、姑は専業主婦的な仕事に転じたという。耕耘機やトラクターの導入にともない彼女の労働が再編されたことについて、感想を聞くと以下のように述べた。

「トラクターがきて私の（碎土の）仕事はなくなったけれど、機械を使わない場所、畑とかを耕したりした。お爺さん（舅）に次々あれこれ田起こしとは違うことをやっつけといわれたから仕事が減ったという感じは特別なかったように思う。それほど嬉しかったという記憶はない。それよりも、トラクターが来たとき夫はすごく嬉しそうだった」

どうやら耕耘作業の機械化を喜んだのは男性だったようである。しかも、女性は田の碎土労働が減少した代わりにほかの仕事を担うようになり、労働そのものが減少したと感じたわけではなかったようである。では、田植えはどうだったのだろうか。

「娘時代は（田植は）晴れ舞台っていう感じで楽しかった。けど、結婚して子どもができてからは大変だった。朝早く起きて苗代から苗を取って束ねている間に空がしらみ始める。とにかくちょっとでも田んぼに早くいかないと、その日のうちに予定が終わらない。隣近所でどれだけ早く田にいったら植え始められるかは競争でした。遅い（遅く田にいく）といやみを言われました。出かける前に自分らの昼ごはん、家に置いていく子どもが起きてから着る服やほかの人の朝ごはんの準備をしてから家を出ました。後からおばあさん（姑）が子どもをおぶってやってきて（私は）お乳をやる、そのころは赤ん坊を置いて田植えに出かけるときには泣けてね、辛かったです。田植えはずっとかがんでするから腰が痛くて。裸足で水に入るから朝のあいだは足が冷たかった、足が痺れてくるんです。そしたら、田植え靴っていうのが出てきたのでね、それを履くようになってからは朝でも足が冷たくなかったので本当に嬉しかった。うちには最初に歩行型の田植え機が来ました。田植えするのにかがまんでもいいので楽やった。機械の後ろをつけて歩いて、うまく植わってないのを植えなおしたりするだけです。（機械植えになって）苗の準備の仕方も代わりました」

「私はどんな機械よりもこの田植え機が一番うれしかった。手植えのときは結構あちこちから（手伝いに来てほしいと）声がかかって（雇用され）、家族も自慢してたけれど、頼まれたら自分ところ（自作地の田植え）が済んでるのに、私だけいつまでもずっと田植えをしてました」

田植えは女性にとって労働そのものが大変であっただけでなく、育児や子育てのライフステージでは精神的にもかなりの重圧を女性に与えていたことがうかがえるコメントである。農家の嫁は産後であっても、前かがみの姿勢のまま苗を植え続ける過酷な労働をほぼ一ヶ月続けなくてはいけなかった。Rさんを含めほかの女性も、毎年田植えが始まった最初の2日ほどは、身体中が痛くて歩けないほどだったと語った。さらに、田植えでは女性は植える早さと正確さが求められた。大勢の女性たちでおこなう田植えでは、彼女たちの技術は他者と比較されて、その技術が一人前の嫁かどうかという評価の基準にもなったという。また、嫁が他家で雇用されれば嫁は婚家に賃金収入をもたらしたのである¹⁴⁾。

このように、稲作農業経営において田植えは、女性にとって最も重要な技術労働であり、それは、家族に現金収入をもたらす技術でもあったのである。そのため女性たちは子どものころから一連の田植え労働を習得させられていた。身体的に過酷であっただけでなく、ときには精神的にも女性たちの重圧となっていた田植え労働が、歩行型の田植え機に取って代わったことを女性たちがとても喜んだということとはよくわかった。

次に除草労働であるが、Rさんの家では噴霧器、草刈機の導入がほぼ同時だったという。除草労働が機械化されたことを機に農薬も多用されるようになり、Rさんは田の草取りをしなくてよくなったという¹⁵⁾。田の草刈り労働はなくなったが、その代わりにそれまで夫と舅が分担しておこなっていた畦草刈りの労働を、Rさんが代替することになり、Rさんは草刈り機の使い方を習得した。次に刈取り労働についてみておこう。

「手刈りの時は家族総出で毎日あたりが暗くなるまで稲刈りして、暗くなったらその田の中につくったはさに架けました。手刈りのころは、おじいさんがみんなにもう帰ろうと声をかけるまでその日の仕事が終わりませんでした。月夜の晩は嬉しかった。明るいので遅くまで作業ができました。バインダーが導入されて機械で刈り取るようになる

と、機械は夫が操作して私らは稲束を拾い集める作業をしました。手刈りに比べるとそれはずっと楽でした。この機械のときは子どもらも束を拾う手伝いをしていました」

機械化以前の刈取り労働についてRさんは、家族総出でおこなった収穫作業ということもあり、苦痛だったという記憶はあまりなかった。それよりも強調されたのは刈取り後のことであった。女性たちは当時の米の供出期限を守るために、乾燥、脱穀を急いでしなくてはいけなかったようであり、そのことが大変だったと語られた。

以上、稲作経営における手労働と機械導入の初期における労働の変化、およびそのときの女性たちの思いをみてきた。こうやってみていくと、田植え労働の機械化はやはり女性たちに大きなインパクトを与えたことがわかった。田植え機が導入され田植え労働の時間が短縮されたことで、時間に追われて働いていた女性たちにわずかばかりではあるがゆとりがもたらされたことは事実であろう。その後、農業機械は短期間に発展したのだが、次節では、機械が更新された前後において女性の農業労働がどのように変化したのかについてみていこう。

4 女性の農業労働の再編

4-1 機械の更新と労働内容の変化

手押しのトラクターが乗用型のトラクターに更新されたことでRさんの農業労働は以下のように再編された。

「乗用型トラクターが(家に)きてからは、私は田堀り(耕耘)の仕事はほとんどしなくなりました。運転は夫や舅、男の人がしましたし、そのころは(夫は)私の代わりに息子を連れて田に行くこともありました。だから、乗用型の機械に変わってからは、どんなふうにしていたのかわからんことが多いです」

Rさんの耕耘作業は、機械が歩行型から乗用型に転換したことを契機にほぼなくなったようである。そして、そのころは次世代の育成も兼ねて当時小学生だった息子を夫は連れていったという。また、Rさんは畑を耕す仕事もこのころなくなったという。この時期は、大小複数の機械が家にあり、夫や舅が機械で田畑の耕耘作業をおこなっていたからであった。歩行型の機械に乗用型の機械が加わったことにより、Rさんは耕耘労働からほぼ完全に離れたのである。また、この頃に夫は農外の仕事に就いた。田植え機に

ついては以下のように述べた。

「機械を新しく買うときはどんなのかわかりませんでしたから、もっと楽になるとみんな思ってたと思います。手押しの田植え機がはじめて入ったころは田植え機の横について歩きながらゆっくり作業できましたが、乗る田植え機(乗用型)になったら今度はえらい大変になりました。お父さん(夫)は乗ってるだけやからいいけど、私らは機械に合わせていろんなことをしなあかん。今までみたいに人が歩くスピードで仕事してたら間に合わない。苗の入った重い苗箱を持って、機械より先回りをしてね、とにかく走り回らないといけなくなりました。車(田植え機)に乗ってる男の人は車を止めて待っているのがかなん、時間ももったいないと思うのやろうね。早よもってこいってよう怒られました。こんなことになるとは思ってもみなかった。機械を買うのを決めるのも使うのもお父さん、女は逆らえませぬ。お父さんにしたら、機械を買うたら女も楽になると思ってたと思いますけど。大きな田植え機になってやっと走り回らなくてよくなりました。」

女性の田植え労働は、歩行型から乗用型に機械が更新されたことにより、複雑なものへと再編されたのである。歩行型から乗用型への機械の発展は、男性の労働量の減少と女性の労働量の増加をもたらした。その背景として考えられるのが、作業のスピードが大きく変化しことであった。夫婦は農作業のパートナーであったにもかかわらず、機械作業をする夫とその機械作業に合わせて雑多な補助作業をする女性との間で仕事をこなすペースが全く違うものになった。そのため、女性は機械の作業速度に合わせて走り回らなくてはいけなくなったのである。これは刈取り労働についても同様であった。

「バインダーで刈るようになったときはちょっと楽になったんかな、あまり覚えてないけれど。でも、最初のコンバインはそれはもう大変だったことを覚えています。女は下回りを全部せなあかん。動いている機械の下で袋で糶を受けて、袋が(糶で)いっぱいになったら袋ははずして次の袋を機械の下に付け替える、はずした袋は田んぼの端に持って行って、また機械について歩くその繰り返し。袋は重たくて20kgほどあったと思う。重たいうえ次々やらなあかんから忙しくて目が回りそうやった。この機械の期間が10年くらいかな結構長かった。(機械を運転する)

お父さんはいいなと思った。機械がないときは田植えがえらかったけど（しんどかった）、乗る機械になったら田植えも稲刈りもえらかった。そのあとホッパーで軽トラに移す機械になってやっとしなくてよくなりました」

乗用型の田植え機とコンバインが導入されたときに、機械は男性が操作し、女性は「下回り」といわれたあらゆる雑用的な労働を一手に担うことになったのである¹⁶⁾。どうやら機械が発展し乗用型へ移行した過程では、誰もが想定していなかった雑多な作業が必要になり、そして、それは機械を操作しなかった女性が担当したことがわかった。もっとも、Rさんの家に多くの労働力があれば、これらの問題点は解消できたのかもしれない。だが、すでに当時はRさんの家でも夫と夫の弟は農外に出ていたのである。

4-2 稲作経営の機械化が女性にもたらしたインパクト

以上、稲作農業における機械の導入初期から中型機械への移行期について、女性の農業労働の内容変化と機械化に対する女性の意識をみてきた。経営としてみると、機械化は労働時間の短縮と経営規模の拡大を達成させ農家を幸せにしたはずである。だが、その発展過程では記録には残されていないような労働が生み出され、それを女性が一手に担っていたことがわかった。また、女性たちが本当に嬉しかったのは初期の歩行型田植え機の導入だったのだというのも興味深いコメントであった。以下では、女性の農業労働と技術とのかかわりから農業の機械化について考察したい。

注目すべき重要な点は以下の二点である。一点目は、やはり田植え機の導入についてである。歩行型の田植え機が導入されたことを契機に、それまでは女性が占有していた田植え労働に男性が本格的に参入した。この時点では女性が保有していた田植えにまつわる技術がまだ重要だったと考えられる。だが、乗用型になると、それまで女性が占有していた早くまっすぐに植える技術は機械に取って代わった。そして、機械を操作する技術は男性が占有し、女性の労働は技術とはあまり関係のないより周辺のなものへと再編されたのである。

さらに、新しい技術が導入された際に女性はその技術習得に参加できなかった。田植え機の導入は、女性たちが農業の技術から遠ざかる契機になったと考えられた。そして、それは刈取り労働においても同様だった。刈取り労働の機械に際してでも、男性が機械を操作する技術を習得して労働を軽減させた一方で他方、女性は次々生み出される雑多

な労働を担うことを余儀なくされた。

手で植える田植えは過酷でたいへん辛いものであったと女性たちはみんな語った。だが、その技術は当時代替が不可能なものであり、女性たちが誇りにできたものでもあったはずである。田植えの機械化は、女性にとって意味のあった労働を単純で周辺の作業へと再編したのである。女性が技術から遠ざかり、一時期とはいえ不平等と思われる労働を担ったことは、機械の大型化とともに女性が稲作農業経営から遠ざかる要因として作用したかもしれない。

二点目は、機械化の過程で技術が特定の個人、つまり、当時の担い手である男性に集中したことである。稲作経営が家族総出の労働であったときは、それぞれの技術は家の手伝いを担うことを通じて次世代にも継承された。だが、機械化により女性は重要な技術から離れ、また他方では、機械の操作が危険を伴ったために、機械の大型化にともない子どもたちは機械作業にかかわることが少なくなったのである。このような経緯で次世代までもが稲作経営から遠ざかったという側面も見逃せないだろう。

まとめ

ここまで、稲作農業経営の機械化で女性の農業労働がどのように変化したのかを明らかにすることで、女性の農業労働の再編と技術とのかかわりを検討した。最後にいま一度全体をまとめておこう。

各機械の導入前後において女性の労働内容がどう変化したのかを詳細にみていくと、女性の農業労働は機械化の初期段階におおきく再編されたことが明らかだった。とりわけ、女性に大きなインパクトをもたらしたのは田植え機だった。手植えから機械植えになり、女性は肉体的にも精神的にも開放された。だがそれが乗用型の機械に移行すると、女性たちは機械を操作する新しい技術の習得にはかかわれず、機械作業を補足するための周辺の作業を担うことになった。そしてこのことは、女性たちが稲作農業経営の新しい技術から遠ざかる第一歩になったと考えられた。刈取り労働でも同様の労働の再編が生じた。機械を操る男性に対して、女性たちは機械の速度に合わせて雑多な作業をしなくてはならなかった。

つまり、技術の発達過程では、従来まではなかった周辺労働が生み出され、機械を操作する男性の労働は軽減された一方で他方、女性の作業量は増加したのである。女性たちが労働の軽減を望んだことは当然であり、機械が更新されたことを契機に女性が稲作労働へのかかわりを希薄化さ

せたのは納得がいくことであった。このように、稲作農業経営において機械や技術が更新されたことを契機にして、世代交代はもちろんのこと、女性を始めとする農家の家族と稲作労働との関係が希薄化したということは興味深い点である。

また、機械化の過程で新しい技術は特定の男性に集中していった。換言すれば、稲作農業の機械化の過程は、家族総出の家の仕事だった稲作経営が個人の農業者の仕事になる過程であった。稲作農業の機械化による近代化は、高齢者を皮切りに妻や次世代を稲作農業の技術から切り離し、担い手の男性一人に技術と仕事を集中させたのである。もしも、稲作農業の機械化において一部の技術を女性が担っていれば、現在はまた違った農業、農村の姿になっていたかもしれない。

主要参考文献

- 荒木幹雄『稲作経営発達の論理—技術と経済の矛盾—』富民協会 1989 年
- 大内雅利『戦後日本農村の社会変動』農林統計協会 2005 年
- 大森和子・好本照子・安部和子・伊藤セツ『家事労働』光生館 1971 年
- 栗見出在家のあゆみ編集委員会編『栗見出在家のあゆみ』2006 年
- 新保満『村が栄える条件』NHK ブックス日本放送出版協会 1983 年
- 世界農林業センサス農業集落カード 農林省 1970 年
- 世界農林業センサス農業集落カード 農林省 2010 年
- 風車の町の女性史づくりの会編『湖の辺 女ものがたり』サンライズ出版 2002 年
- 細谷昂『現代と日本農村社会学』東北大学出版会 1998 年
- 宮本常一『農業技術と経営の史的側面』未来社 1975 年

- 1) 大橋一雄ほか（1955）『農民の早死に関する研究』農林省
- 2) 新保（1983）pp.90-94
- 3) 耕耘機の台数については 1970 年世界農林業センサス農業集落カードにより、役牛データについては『栗見出在家のあゆみ』p119 による。役畜は 1970 年には姿を消した。
- 4) 当集落では 1969 年と 1974 年の二度の圃場整備が事業実施された。

- 5) 聞き取り調査は 2012 年から 2015 年にかけておこなった。聞き取り調査では 80 歳代の女性 4 名、70 歳代の女性 3 名および 70 歳代の男性 2 名からお話をうかがった。年齢は調査時のものである。
- 6) 牛の世話はこの集落では主に男性がおこなっていたが、分家などでは嫁の仕事となっていたという。
- 7) 1 反は 0.1ha の面積である。
- 8) 田植え時は他の集落に嫁にいった娘はもちろんのこと、親戚同士が互いに手伝いをするために行き来したという。
- 9) 経営規模の大きな農家は田植えの女性を確保するために、年末に金品を持参して次年度の田植えを依頼することも当たり前におこなわれていた。また、未婚の女性を雇用する場合は嫁定めの側面も併せ持っていたという。当集落では多くの家で近隣の島から女性の手伝いが来ていたという。
- 10) 刈取りしたあとは、脱穀、乾燥作業もあった。乾燥作業は女性に任されており天日乾燥や夜なべをして火をたく乾燥作業もあった。冬季は麦、菜種栽培と土寄せ、または、味噌や醤油づくりなどの仕事があり、稲刈りが終わっても農業関連の労働から解放されることはなかった。
- 11) 耕耘機の価格は、当時の牛の値段が 15 万円ほどだったのに対しておおよそ倍の値段であり、農協からの借り入れにより購入されたという。また、購入に際する決定は夫がおこなったことが語られた。
- 12) カッコ内には必要な言葉を補足している。
- 13) 碎土労働とは土の固まりを鋤等で細かく砕く作業を指している。
- 14) 田植えで雇用された際の賃金は契約者である世帯主同士でやり取りされるため、女性はその内容を詳しく知ることがなかったという。また、それは賃金ではなく労働でのお返し、またたとえば、畳やふすまという雇用者側が調達に有利な物品でやり取りすることも盛んにおこなわれた。
- 15) この地域一帯では 1962 年からヘリコプターによる防除が始まった。
- 16) このころに女性の担った労働がいかに大変だったかということについては、男性からの聞き取り調査でも語られた。